

微妙音

発行所
無量山 真宗寺

☎ 862-0911

熊本市東区健軍4丁目17-45

☎ (096) 368-3759

☎ (096) 368-3780

E-mail: shinshuji@triton.ocn.ne.jp

郵便振替: 01960-6-52645

加入者名: 真宗寺事務局



秋・彼岸会法要

9月22日(月) ～ 24日(水)

勤行・13時30分～14時
法話・14時～16時

講師・譽田和人師

(元真宗大谷派宗務役員)

受付、お茶出し当番・日程

22日(月) 西無国

23日(火) 新外、三郎

24日(水) 上無国

法話の休憩時間(15時頃)に、右記地区の方々が用意された「盛出し」(お弁当)やお茶菓子を、参詣くださった方に召し上がっていただきます。
三日間の期間中、お時間のある時にいつでもお参り下さい。

真宗寺屋外トイレの完成 本堂ぬれ縁改修のお知らせ

この度、真宗寺の境内にある屋外トイレの新築工事と本堂のぬれ縁の改修工事が無事に完了いたしました。お参りの際はご利用下さい。



帰敬式をお受けください

十月二十六日(日)

場所・真宗寺本堂

時間・午後2時

※帰敬式を受式すると、仏教徒としての名前前である法名「釋(尾)〇〇」が授与されます。

費用・10,000円 受式者募集

みみようおん

よみがえれ あの時代へ
武器を持たぬことを伝えた 先人たちの声を
永遠に語り継ぐのさ
脅かすことでしか 守ることができないと
繰り返す戦争 忘れゆく 愚かな 権力よ

仲里幸広 作詞・作曲「HEIWAの鐘」

今年には戦後八十年になる。八十年というと私にとってとはとても長い時間のように思えるが、よくよく考えてみるとまだ八十年しかたっていないかと思う。毎年八月六日と八月九日には広島と長崎で平和祈念式典が行われている。

私が小学校低学年の頃、母校では平和教育として夏休みの八月十五日に登校日が設けられていた。学校の中にいるミーティングルームに戦争に関する写真や記事が張り出されていた。

その中でも特に印象に残っているのは、原爆で背一面を火傷した子供の写真である。その時に感じた「戦争」というものが引き起こす、無情な残酷さは今も私の中に確かに残っている。しかし、いつからか小学校での平和学習は無くなった。様々な事情があるのだと思うが、戦争を伝える一つの機会が失われたことは事実である。

年々戦争を経験された方々は減っていく。戦争を知らない世代である私は正直、戦争の本当の恐ろしさを、身をもって実感することはできない。戦争を知ったか。

先人たちの声に耳を傾け、今も昔も変わらずに響き渡っている平和の鐘(南無阿弥陀仏の声)を聞いていくことこそ我々にできる平和への一歩ではないだろうか。(宮地 聖光)

明日ありと思う心の仇桜
夜半に嵐の吹かぬものは

8月7日、京都の東本願寺で「得度式」が行われ、真宗寺の長男・佐藤惟人と次男・佐藤称人が受式しました。

「得度」とは、僧侶になるための儀式であり、受式を希望する人は寺院に所属し、全国各地の各教務所の得度考査に合格した上で、本山にて得度式を受式します。真宗大谷派では、親鸞聖人が得度したとされる年齢にあわせて、9歳から僧侶になることができます。

得度式では大人も子どもも白い装束を着用し、親鸞聖人の御真影を安置する御影堂にて、頭にかみソリの刃を当ててもらった「剃刀の儀」と呼ばれる儀式が執り行われました。その後、参加者は僧侶になったことを示す「黒袈裟」と呼ばれる黒色の衣を着て初めての勤行をしました。



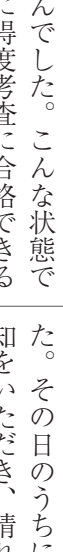
京都・東本願寺で得度式

この度、真宗寺の長男・佐藤惟人と次男・佐藤称人が真宗本廟（京都・東本願寺）で御度式を受式しました。

長男の惟人も次男の称人も「正信偈」は以前からお寺の法要に時々参加していたので、大きな声でゆっくり声に出すようにと言われ、二人とも緊張

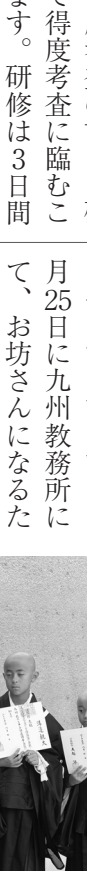
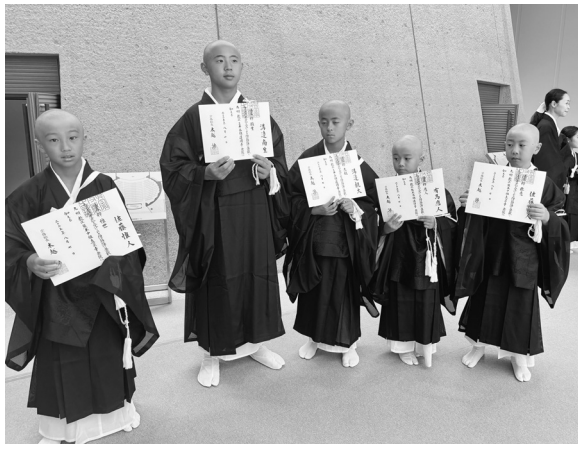
真宗大谷派の僧侶となるには東本願寺（京都）で行われる「得度式」を受式する必要がある。その「得度式」を受けるには、各教区で行われる「得度考査」に合格しなければなりません。

九州教務所（久留米市）で他については全く知識がありませんでした。こんな状態で本当に得度考査に合格できるか、内心ドキドキしていました。限られた時間の中で練習を重ね、少しずつ読めるようになりました。



行われる得度考査の前に、研修を受けて得度考査に臨むこととなります。研修は3日間に分けて行われ、それぞれ、得度の意義やお経の読み方、装束の扱い方などを教わります。研修最終日は研修のあと、得度考査となります。

そして、いよいよ3月25日に九州教務所にて、お坊さんになるために必要な技能を試される得度考査当日を迎えました。親鸞聖人が得度した歳が9歳だったことから、得度は9

A black and white photograph showing three Buddhist monks standing in a row. They are wearing traditional black Buddhist robes (kassaya) and white tabi shoes. Each monk is holding a white rectangular scroll with Japanese text written on it. The monk on the left is slightly taller than the other two. The monk in the middle is looking down at his scroll, while the monk on the right is looking towards the camera. The background is a plain, light-colored wall.

第七回（最終回）
佐藤先生のこと
渡辺京

第七回（最終回）

渡辺京二

一昨年12月25日に92歳で亡くなった思想家家の渡辺京三さんは、真宗寺とも40年以上にわたって深いご縁があり、先代住職との親交も厚かった。

平成24年に勤まった先代住職二十五回忌法要の際に語ってくださった講話を連載させていただいた。

その薫人君が見事に成長して、これからまた若い人がやってくるんじゃないかと、思います。薫人君自身が若うございますし。しばらく若い人たちがあまりやつて来なかったこのお寺にですね、まだ現代の若者にはお寺などといったらダメいもの、頂上から下へ来るものはない、ということなんです。満足しているというのは、自分の事欲が満たされないというところではありません。この天地生まれて「俺はこれでいいか」「人としてもっと成すき」とあるんじゃないかという点で、「もっと、もっと」と思っておられた方であつたので、「もっと、もっと」と

「はい」ってわけでもないか
「お寺に來い」って言っても
上でしようからな。なかなか
はいかと思ひますがその点は
いやはり、今後の薫人君の意欲
努力になると思う。それで薫
う道を歩んでいく上で終点
ものがない。「もつと
もつと」という、そういう
祖父さんの氣持ちを薫人君
受け継いでくれたらと思う
であります。

人君に一つ考えてもらいたいのは、さつき言いました、お祖父さんが何かで満足しない

それで、「己をかばうな」という言葉と、もう一つ他に「を覚れ」ということですね

真宗寺納骨堂
追弔会法要

日時：11月8日、9日

午後1時30分から

久留米・蓮明寺住職

真宗寺の納骨堂に加入しておられる方の、一年に一度の追弔法要になります。

亡くなっていかれた身近な方との関係を通して、仏縁に出遇っていく大切な行事です。亡き人を通して、一人ひとりが真宗念仏の教えを聞かせていただくご縁になればと思います。

みなさま是非ご参加くださいますようお願い致します。

八月の盆も過ぎたがまだ
まだうだる様な暑さが続い
ている。

勤めしていると僧侶である
とか、門徒であるとか、お
参りをしに来たとか、お参

一年前の微妙音を読み返してみようと、まったく同じような書き出しで自分がこの月忌参りの日誌を始めていて、今年の夏もやっぱり底なしに暑い。熊本に来て一年半、熊本中をバイクで

りしてもらったとか、上手だとか下手だとか、立場だとか境目だとかが曖昧になつてく。逆に言えば立場とかにこだわる私であるから心地良く感じるのかもれない。

走つて、お参りして回つた。ある程度は道に慣れてきたのかも知れない。毎日の行程もある程度予定通りにできるようなものもなつた。だけれど常に次のお参り先に向かうことばかりを考えて、時間には追われていただけの日々を送つていやしないかとも思う。

一概には言えないかもしれないが、『正信偈』は近しい人が亡くなったことが縁になつて初めて耳にしたたり声に出すようになる方が多いだらうと思う。悲しみを起縁として初めて『正信偈』に触れる方が多いのではないだらうか。

とあるお通夜で座席の一

そんな中でしばらくぶり
にお参りに行つた。門徒さ
んのお宅でいつも一緒にお
勤めするお
婆さんがお
られなく
なつていた

目録
目録
目録

一つ一つにお勤めの本が置か
れていて、会場の皆で勤め
た『正信偈』が強く憶えに
ある。悲し
みのたな
かで聞こ
えてくる他者

ことがあった。大分耳が遠くていらつしやつて、一緒ににお勤めしていてもところどころずれることもあったのだけど、私にとつては何となく嬉しいというか、心地良い時間だった。

「ギミムリヨジュニョライイー」から始まる正音偈は一度はお聞きこなつ

の聲は他者の存在であり、その声の響きを聞くなかに共に悲しむ他者を自分の身のうちに受け取る。自他の声と共に響きあう『正音偈』を勤める中には、自分だけの悲しみから解き放たれる瞬間もあるのではないかと

思つ

そのお婆さんは自室から

たことがあつたのではないかと
思ふのだが、以前のお寺
で月参りをしてゐた時には、
一緒に「正信偈」を勤める
ことはばばだけだつたと思
ふので、今一緒に勤める
時はなんだか嬉しさを感じ
る。

きつといまでもご命日の

だからなるべく後ろで読む人のペースや音程に合わせようとお勧めすることになっている。そうして

日には『正信偈』をお勧めされておられるのではないかと思っている。

（倉谷隆広）

(倉谷隆広)

「何かもうとやりたい」、「何かもう不満だ」という気持ちがあられたからでしよう。通はです、ね、青年たちがっぱい育つてくれている、聞にも載るようになったし、うなれたから大人たちも沢山来るようになったし、そこで満足するのが普通でしょうが、あんな人は満足しない。それは何っていうと、やはり「己に寛めよ」ってことは何を意図したのかというと、あの方間違いない真宗の行者でありますから、自分が救われる人間であるということをしつかり見つめろ」ということは根本的にございました。

大事にしておられた、自分のお弟子さんのことを「あれはまだ、尽くし方が足りません」と言ったりしておられませんでした。尽くし方が足りんというのは、要するに自分がかわいいんだと。その尽くすつていうのは己を精一杯ギリギリまで働かせる。自分のためではなく人を大事にするっていうことは、自分の心の中に本當に人が大事にしようという気持ちが生まれるのかどうか、そういう自分を捉えていくことでもあったのかと思います。何にせよ、それは難しい言葉でございまして、私ごときが「それはこういう意味であらう」なんて申し上げるのはお

[illegible]

「おられたら九十三歳におなりです。六十九歳で亡くなられましたからね、考えてみると早死にですけど、それでも早死にという感じが一向にしないのが不思議な方でございますね。」

先生の亡き姿を偲びつつ、
ここで話を終わらせて頂きます。
ありがとうございます。

(完)

[illegible]

真宗寺に



真宗寺前住職二十五回忌法要
に際し講話する渡辺京二さん



僕も小学生の頃はよく幽霊を見ました。声も聞こえてきましたし、夜が怖かった記憶があります。大事なのは無理に話をつくらないことですかね…そのうち会えなくなりますから

いのちの祈り その5

―「群萌の会」講義録―

宗正元師 講述

目覚める心

今は仏という言葉そのものが見失われてきた時代ですね。仏といったら目覚める智慧をあらわす言葉です。そもそも仏というのは、「覚」の当て字です。目覚めるといふ智慧を「覚」という。その智慧をインドでは仏陀という。仏陀はお釈迦さまのことではないですよ。ブッダというインドの言葉に漢字を当てている。だから仏という字に特別な意味があるわけではない。

こういう言葉は仏教にたくさんあります。例えば涅槃という言葉。これも字に意味はないです。ニルヴァーナとい

う言葉を、発音を漢字であらわしている。ではニルヴァーナはどんな意味かというところ寂滅とか、寂滅。悩みに惑わされないような、静かな落ち着いた境地といううなことを言いあらわす言葉です。うっかりすると漢字の意味があると思ってしまうけれど、仏という漢字の意味があるわけではないです。フランスと間違わないようにしないといけない。

仏の名だということは、私どもに目覚める智慧を手渡している。名というのは名前ではなくて、はたらきを言いあらわしている。どういう智慧か具体的にいえば、自分自身

に目覚めるといふ智慧です。私どもは自分自身に目覚めるといふことは、日ごろはあんまり考えませんけどね。分かってはいるつもりになっていて。自分自身はちゃんとここにおると思っている。そういうことが実は分かっていなかった自分自身に目覚める。そういう道を訪ねてきたのが仏教の伝統ですよ。仏教という言葉で言いあらわされるね。

それは別の言葉で言えば、菩提心です。菩提心という言葉は、目覚める心のことです。それを一般的には求道心とかね。求道心も色々ありますから、芸術の世界とか、学問の世界とか、その道を極めつくすという意味で、そこにはそれぞれの道を求める心があります。そういうものではなくて、無上道心といって、どのような人の人生にもそこに大事な意味を問うていく、そこに大事な意味を見出していく。

本願のはたらき

そういう求道心です。それで無上という。南無阿弥陀仏になつておる法蔵菩薩の魂のこゝとを「無上正真道意」という。こういう独特な言葉で、南無阿弥陀仏の歩みを語っておられるのが『無量寿経』というお経です。南無阿弥陀仏の物語です。南無阿弥陀仏がどういう道を開き、どういう世界を開いてきたか、どういう人生を生きられたか。そういうことが語られているのが『無量寿経』という経典です。

ですから『無量寿経』という経典はいくつもあるんですよ。いくつもあるというのは時代の違いです。時代社会がいろいろ変わっていきますから。そういう時代社会の移り変わり、場所の移り変わり、そういうことを通して、そこに南無阿弥陀仏の道がさらに深く、さらに広く掘り下げら

れている。真宗聖典に載っている四十八願であらわれている『無量寿経』は一番新しい。古い『無量寿経』は本願は二十四願です。

本願というのは行です。本願が我々の上にはたらいていく姿です。行と言っても修行ではなくて、現行です。どういう形で、その本願のはたらきがあらわれてくるのか。そういう本願のはたらきを、一番新しい『無量寿経』では四十八であらわしている。四十八願とはいっても四十八あるわけではない。四十八もあつたら本願とは言えないでしょう。根本の願といったら一つ。こういうことも忘れてはならない大事なことですよ。

真宗聖典には一番あたらしい大経といわれる『仏説無量寿経』しか載ってありませんが、親鸞聖人は古い『無量寿経』のことも取り上げておられる。『教行信証』の「行巻」のところに「如来会」という名前のお経、その後に普通は『大阿弥陀経』というのですが、『仏説諸仏阿弥陀三耶三仏薩婆仏壇過度人道経』こういうことが長い題目になっている。これが二十四願の『無量寿経』です。その後に出てくる『無量清浄平等覚経』も二十四願です。時代社会の移り変わりの中で、その内容が深められてきた。

本願のはたらきというものはどういうはたらきなのか。そういうお経は『無量寿経』しかありません。南無阿弥陀仏の歩みです。南無阿弥陀仏がどういう人生を生き出し、どういう世界を開き、どういう歴史を開いてきたか。どうい

う人々の歩みを開いてきたか。そういうことを語ってあるのが『無量寿経』です。現在五つ残っている。親鸞聖人は四つ取り上げている。五つと言っても、同じ時代に生まれただけではないですよ。時代が移り変わる中でそのはたらきというものが深められ、非常に広く展開していく。キリスト教では二つになっているんですよ。旧約聖書と新約聖書。キリスト教にもそこに歩みがあるわけです。神が我々を助ける。神が約束をどういう風に展開してきたか。旧約聖書、新約聖書と「約」という言葉を使っております。

南無阿弥陀仏になつておる弥陀の誓願はどういう風に展開するのか。誓願というのは、お約束です。仏様の約束です。神様の約束を語っておるのが聖書です。神様の約束、神様の愛が語られている。南無阿弥陀仏の方は南無阿弥陀仏になつておる仏様の約束。それは本願とか誓願とか誓いという言葉をいいあらわしている。南無阿弥陀仏はそういう仏様のいろんなはたらきというものを私どもに手渡して下さる。仏様が名のり出るという意味を、親鸞聖人は「回向」という言葉でいいあらわして下さっている。

自在に生きる

仏様のはたらきは普通は慈悲と智慧であらわされます。「無量寿」と「無量光」です。それが仏様のはたらきです。智慧のはたらきが「覚」ということ。目覚める智慧です。仏様の智慧という場合には、単に誰か一人の知恵という意味ではないですよ。人間の知

恵という意味ではない。それぞれの人々の中で相続されていった。親鸞聖人はこれを「仏相念」といわれる。仏と仏が相念するという言葉で言いあらわされるのは、人々の中で相続されてきたということですよ。それで、『無量寿経』を見てみると五十三の仏様の名前が出てきます。「五十三仏」です。偉い人の名前じゃなくて目覚めた人です。自分自身に目覚めた人。人生に目覚めた人。それらただ自分で目覚めた人というのではなくて、先だって目覚めた方にふれて目覚めた人です。つまりそういう形で、人々の中で相続されてきた。そういう歩みを五十三の名でいいあらわしている。念仏を通して自分自身に目覚めていかれた。人生に目覚めていかれた。そういう方々の歩みです。そういう人々の歩みを通して生まれ出てきたのが法蔵菩薩です。

南無阿弥陀仏の道を歩いて行かれた方々の歩み。どんな歩みなのかを語っているのが世自在王仏という方です。五十三仏を代表して、その伝統をいいあらわしている仏様が世自在王仏です。世自在に生きる仏様です。どのような世であろうと自在に生きる。無碍自在です。どのような世の中になろうと、それを無駄にしない。妨げにしない。自在に生きる。全責任を負う。ただ世自在王仏は特殊な人ではなくて、南無阿弥陀仏から生まれ出てくる目覚めた人です。どのような世の中も自在に生きる。そういう南無阿弥陀仏の伝統を受けた世自在王仏を通して生まれ出てくるのが法蔵菩薩です。（次号に続く）

行事予定

9月 1日 (月)	『歎異抄聴記』輪読会	
10日 (水)	脳トレ健康体操	
18日 (木)	仏具磨き	午前10時
22日 (月)	秋・彼岸会法要	
24日 (水)	講師：譽田 和人 師	
28日 (日)	定例法座 『正信偈』に聞く	
10月 1日 (水)	『歎異抄聴記』輪読会	
8日 (水)	脳トレ健康体操	
22日 (水)	脳トレ健康体操	
28日 (火)	定例法座 『正信偈』に聞く	
11月 1日 (土)	『歎異抄聴記』輪読会	
8日 (土)	納骨堂追弔会法要	午後1時30分
9日 (日)	講師：溝邊 伸 師	
12日 (水)	脳トレ健康体操	
26日 (水)	脳トレ健康体操	
28日 (金)	定例法座 『正信偈』に聞く	
12月 1日 (月)	『歎異抄聴記』輪読会	
10日 (水)	脳トレ健康体操	
17日 (水)	仏具磨き	午前10時
27日 (土)	餅つき	午前10時
28日 (日)	定例法座 『正信偈』に聞く	
31日 (水)	除夜の鐘	午後11時45分
1月 1日 (木)	修正会	午前7時30分

◆定例法座『正信偈』に聞く ⇒午後1時30分
◆脳トレ健康体操 ⇒午後2時00分

※各学習会、行事については日程を変更する場合もありますので事前にお問い合わせください。

☎096-368-3759

✉shinshuji@triton.ocn.ne.jp